

「蒙疆」における深澤省三の美術活動

王 中 忱*

1. 童画画家から従軍画家への歩み

深澤省三(1899~1992)は、童画家として広く知られている画家である。その「閑話 思い出ざるままに」という回想文によると、彼は東京美術学校在学中、清水良雄(1891~1954)の紹介で、鈴木三重吉(1882~1936)が主宰する児童文学誌『赤い鳥』に、挿絵スタッフとして迎えられた¹⁾。最初は画学生アルバイトとして働いたようであるが、鈴木三重吉と意気投合したため、大正9(1920)年『赤い鳥』第4巻第5号に登場してから昭和11(1936)年復刊12巻13号(鈴木三重吉追悼号)まで、ほぼ17年間、絶え間なく挿絵、口絵、カット、表紙絵を描き続けて、『赤い鳥』を支えた。小田切進(1924~1992)は、日本近現代文化・芸術史における『赤い鳥』の果たした画期的な役割を評価する際、「鈴木三重吉がこのようなすばらしい雑誌を興し、新しい時代をつくる大きな仕事をのこしたのは、芥川龍之介・北原白秋・有島武郎をはじめとする一級の文学者たちの援助による所が大きいが、同時に清水良雄、深澤省三、鈴木淳、武井武雄、川上四郎ら画家たちの情熱傾けての協力が無かったら、『赤い鳥』は精彩を欠き、魅力の乏しいものになっていただろう²⁾」と述べている。

深澤省三は美術学校で西洋画を専攻しており、「帝展」に入選したことがあるが、童画の制作は生活を維持するための職業的な仕事でもあったに違いない。とりわけ、昭和2(1927)年に、深澤は武井武雄(1894~1983)、村山知義(1901~1977)らと一緒に日本童画家協会を結成して以後、「童画家の横軸が出来、仕事が急に増え、『赤い鳥』の外にも向かってゆくことになる。『コドモエホブンコ』、『コドモノクニ』、『子供之友』などに多く童画を残している³⁾。しかし、昭和11(1936)年8月、鈴木三重吉の死とともに『赤い鳥』も終刊となり、他の児童文芸誌も経営不振の状態に陥った。深澤の言を引けば、「子供の本の時代でなくなってきた」ので、彼は「蒙古へ行くことに決め」た⁴⁾。後に、深澤省三は自らの「蒙古」体験について次のように語っている。

*中国・清華大学人文学院教授。本稿は、平成30(2018)年3月16日(金)午後1時より岩手大学人文社会科学部1号館第1会議室で開催された、岩手大学人文社会学部創立40周年記念国際シンポジウムにおける同題の記念招待講演(日本語)に基づく。

1) 深澤省三「閑話 思い出ざるままに」(昭和63年8月12日、山中湖畔山荘にて採話)、多摩美術大学美術参考資料館編『深澤省三・童画の世界七十年』、多摩美術大学美術参考資料館、1988年11月、54頁。

2) 小田切進「深澤省三の仕事」、同前、46頁。

3) 仙仁司「『赤い鳥』と深澤省三の童画世界」、同前、63頁。

4) 深澤、前掲「閑話 思い出ざるままに」、同前、58-59頁。

蒙古は私の第二の古里です。8年間暮しました。蒙古では政治にまで重用され、又、モチーフの動物に恵まれ、広大な蒙古がとても好きになりました。明治維新の人間のように、何でも好きなことが出来、年も若かったし、自由にやりました。あんなに面白い国はなかった。しかし、戦争に負けてからは大変でした⁵⁾。

二種類の深澤省三の「年譜」を見てみると、それぞれ「昭和十三年 一九三八 39歳：六月、従軍画家として蒙古に渡り、終戦までの七年間、張家口を中心に絵画制作に励む」⁶⁾、「昭和十三年（1938）：蒙古に渡り、終戦まで滞在、現地人用小学校教科書に挿絵を描く」⁷⁾と記されており、いずれも深澤の回想文と同じく、彼の行く場所を「蒙古」としている。しかし、ここで指摘すべきことは、深澤の言った「蒙古」という言葉がかなり曖昧で、正確な地域名称ではないということである。従って、本稿ではまず、深澤が渡っていった「蒙古」という場所の具体的な所在を明らかにする。その上で、従軍画家としての深澤の活動を考察し、彼の「蒙古体験」に基づいて描かれた絵を分析してみたい。

2. 「蒙疆」という空間

周知のように、「蒙古」は民族の名称であり、その民族の生活する地域をも指している。清朝には、清政府は「盟旗制」で蒙古族を統治しており、分割された数多くの「旗」が、中央政府に委任された大臣・将軍に直轄されるか、或いは中央政府に設置された「理藩院」という機構に管理されていたため、一つのまとまった「蒙古」という行政区画はなかったのである。1912年に中華民国が成立してから、北京にある民国政府は、蒙古族と新たな関係を構築するため、1914年、いわゆる「内蒙古」地域に「綏遠」、「察哈爾」^{チヤハル}、「熱河」という三つの特別区を設置した。その後、1924年11月にモンゴル人民共和国が樹立され、いわゆる「外蒙古」地域が中華民国から離脱することになった。1928年に南京で成立した国民政府は、北京民国政府時代の政策を引き継ぎながら、さらに綏遠、察哈爾、熱河に「行省制度」を導入し、この三つの特別区を「省」に昇格させた。このように見てくると、中華民国になってからも、正式な地域名称としての「蒙古」は存在していないのである。

1937年8月、日本の関東軍が綏遠、察哈爾、及び山西省の北部地域を占領し、その占領地域でそれぞれ、「蒙古連盟自治政府」、「察南自治政府」、「晋北自治政府」という対日協力政権を作った。同年11月22日に張家口で、これらの「自治政府」を統合する「蒙疆聯合委員会」が設立され、「蒙古連盟自治政府」を率いる徳王（テムチュクドンロブ、徳穆楚克棟魯布、1902～1966）がその委員会の主席に就任したが、最高顧問を務める金井章次（1886～1967）が政権運営の実権を握っていた。それゆえ、モンゴル民族自治を目指していた徳王は「蒙疆」という表現に強く反発したが、「日本側は、対『満洲』及び中国政策全体のなかで、『蒙疆政権』の位置づけを検討した」結果、この政権が「蒙疆」と名付けられたという⁸⁾。この政権の名称は、1939年9月に「蒙古聯合自治政府」、1941年に「蒙古自治邦」と改められたが、通称としては

5) 同前、59頁。

6) 『深澤省三画集』、荻生書房、平成元年11月、192頁。

7) 前掲『深澤省三・童画の世界七十年』、68頁。

8) 中見立夫『満蒙問題』の歴史的構図、東京大学出版会、2013年3月、21頁。

「蒙疆政権」と呼ばれ続けており、政権のもとで設立された国策新聞としての「蒙疆新報」も名称変更なく敗戦まで刊行された。それとともに、「蒙疆」という言葉は「蒙疆政権」が1937年11月から1945年8月まで支配している地域を指す地域概念としてもよく使われる。

よって、深澤省三が1938年6月に日本から渡っていった、また敗戦まで滞在していた「蒙古」は、ただ茫々たる草原、青空と白雲、馬、遊牧民などによって構成された異国情趣溢るる空間であるだけでなく、日本軍の占領を背景に作られた対日協力政権によって支配された政治的な空間でもあったと言える。

3. 「蒙疆」の画伯としての活動

著名な童画画家だった深澤省三は、なぜ従軍画家に転身して「蒙疆」に赴いたのか。前に引用した回想文の中に「蒙古へ行くことに決めました」とあるため、軍に徴用されたのではなく、寧ろ自らの意思で行ったと考えられる。回想文はこれ以上語っていないが、深澤は、昭和16（1941）年に発表した「井上璞先生を悼む」という文章で、渡蒙のきっかけについて、間接的に語っている。すなわち、

私が始めて井上先生にお会ひしたのは、今からちやうど四年前、昭和十三年の初夏、張家口善隣協会にお伺ひした時で、井上先生は当時事変突発の折柄、協会理事として非常に重大な責務にあたられ、支那家屋の一室に日夜多忙な生活を続けて居られた時でした。自分が従軍画家として初めて張家口に参りました時義兄村谷氏より、先生が、徳望人格共に高く此の地に来ては、是非第一に敬意を表すべき大人物であることを知らされたので、当時まだ不案内な張家口の裏街のやうな所にある善隣協会への悪路を、馴れない洋車を駆って御挨拶に伺った訳でした。⁹⁾

ここに現れる「井上先生」とは、文章のタイトルにもあるように、退役陸軍中将・井上璞^{まこと}（1877～1941）のことである。この井上は、1934年に陸軍省と内務省などの政府機関の支持を受けて内モンゴルに対する文化事業を行う民間機関として設立された善隣協会の初代理事長に就任してから、度々内モンゴルに赴き徳王と緊密な連絡を取っている。1938年4月、すなわち「蒙疆政権」が出来た直後、善隣協会はこの「蒙疆」の首都となった張家口に「本部」を置き、同年6月に理事長・井上璞がこの本部に常駐することとなった¹⁰⁾。深澤省三が張家口に来てから、急いで井上に会おうとしたことには、ただ郷里の大先輩の徳望人格を慕っていたためだけではなく、「蒙疆」文化事業の指導者の地位にある井上の庇護を得ようという思惑も垣間見える。

また、同じ引用文中で触れられた「村谷氏」も注目に値する。深澤が「義兄」と呼んでいる「村谷氏」とは、「内務官僚、群馬県内務部庶務課長、満洲国民政部刑務司偵課、関東軍囑託を

9) 深澤省三「井上璞先生を悼む」、『新岩手人』昭和16年3月号、2頁。

10) 善隣協会の設立については、何広梅「第二次世界大戦前におけるモンゴル人の留日教育活動——善隣協会のモンゴル人留学生支援事業を中心に——」（『人間文化創成科学論叢』第19巻、2016年、145-153頁）を参照されたい。また、井上璞の内モンゴル訪問及び徳王との関係については、祁建民「蒙疆政府年表」（『県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要』第8号、2007年、249-270頁）を参照のこと。

歴任」¹¹⁾した村谷彦治郎のことであり、当時、「蒙疆聯合委員会」の最高顧問に次ぐ参議という要職を占めていた人物である。日本での童画家としての生活が行き詰まった深澤省三が「蒙疆」に活路を求めるにあたって、義兄村谷の存在がそれに深く関わっていたと推定できる。

深澤省三が1939年7月に家族に寄せた以下の書簡を見れば、渡蒙して一年余り、彼の人脈はさらに「蒙疆政権」の高官層にまで広がっていたことがわかる。

六月二十八日¹²⁾から厚和（以前の綏遠¹³⁾）で蒙古大会があるといふので、非常に期待された。今度の大会は第三回目なさうで、あとは十年後か二十年後でないといふので、催さないものなさうで、正に千載一遇の機会だといふので、村谷参議と木村事務官（五戸の人）の二人に僕の三人、外に金井蒙古最高顧問と大同最高顧問の二人が加わつて一行五人で大青山ホテルといふのに泊つた。

徳王に謁見を賜つたが、僕が想像してゐたより態度も実に王者の風があつて立派だつた。蒙疆政府の建物も見せて貰つたが、なか／＼しつかりしたものだつた。早速徳王の肖像画をスケッチしたが、徳王も大変喜ばれて、自らキャンバスに徳親王と別に蒙古文字でサインしてくれた、かういふことは未だかつて無いことなさうだ。¹⁴⁾

深澤省三は前掲「閑話」からの引用文中で「蒙古では政治にまで重用され」たと述べているが、具体的にどこまで「重用され」たかについては、詳しく言及していない。1940年の段階で彼は「蒙古自治政府囑託」¹⁵⁾という肩書を持っていたようであるが、画家として主に美術分野で活動していたと考えられ、個人の絵制作はもとより、「蒙疆美術家協会」の設立に深く関わっていたようである。この協会の設立趣旨や存立の全貌は明らかにされていないが、『蒙疆文学』昭和17年9月号に載せられた「蒙疆美術協会小品展評」という文章から、協会の活動の一斑が窺える。

この「小品展評」の文末には、「S」という執筆者のペンネームが記されている。同じく『蒙疆文学』に掲載された「オルドス」という時事短評欄の記事によると、「Sさんはフランスが敗れてからなほ約一ヶ年間も巴里に踏みとゞまつてゐた人で」、「張家口をこのあいだ訪れてきた」画家である¹⁶⁾。Sは「小品展評」に、「蒙疆美術家協会の人人はそれ／＼職をもつて居

11) 柴田善雅「日本の蒙疆政治支配体制」、内田知行・柴田善雅共編『日本の蒙疆占領 1937-1945』、研文出版、2007年2月、49頁。

12) 昭和14（1939）年

13) 今のフフホト/呼和浩特

14) 深澤省三「蒙古の旅から」、『新岩手人』昭和14年9月号、18-19頁。この文章の前に、「左記は目下蒙古旅行中の画伯が家人に寄せた近信から書き抜いたもので、文章の責任は記者にあります」とある。

15) 『新岩手人』昭和15年7月号、15頁に載った「張家口県人会」というコラム記事を参照のこと。コラムの最後で「当時の出席者」が列挙されている中に「(蒙古自治政府囑託) 深澤省三」という表記が見える(昭和15年3月29日の『新岩手日報』に掲載された深澤省三「随筆 ターキョーの空」の筆者紹介には「蒙古聯合政府の名誉囑託」とある)。ちなみに、この参加者リストの前にある県人会報告の最後には「六月十二日在張家口(省三生)」とあるため、深澤が執筆した可能性が高いと思われる(「生」は「小生」等と同じ自己謙称と考えられる)。

16) 「オルドス」、『蒙疆文学』昭和17年9月号（1巻3号、蒙古政府成立三周年記念特輯号）、28頁。同欄は複数名により執筆されているようで、無署名記事である。ちなみに、「オルドス」とは、モンゴル語で「宮殿」あるいは「チンギスハーンの祭殿群」の意。当時『蒙疆文学』は日本語版と華文版が別々の内容で刊行されていた。日本語版の概要については、以下の文献を参照のこと。阿莉塔「雑誌『蒙疆文学』（日本語版）目次(上)」：自一九四二年六月至一九四四年八月、『九大日文』第5号、2004年、385-409頁（特に「オルドス」については396頁。ただし、1巻3号については未見とある）。

るので、それ程ひたむきに進めないかもしれないが、要は絵を描く心にある」¹⁷⁾と書いているので、協会のメンバーは主にアマチュア画家によって構成されていたことが分かる。

Sの「小品展評」に深澤省三の名前は現れないが、高玉輝雄が書いた「蒙疆美術家協会研究所設立について」という文章では、協会及び協会の研究所について次のように述べられている。

深澤省三画伯の主宰する蒙疆美術家協会の手によつて此度張家口に蒙古美術研究所が設立され美術を通じて蒙疆の新なる文化創成に向つて発足したことは、同協会がこの時局下の美術課題を如何に研究し如何に果して行くかそしてそれを如何に蒙疆の土地に生かして行くか、その抱負と実践を具体的に示したのものとして蒙疆文化建設運動の上に重大な意味を与へたものと云へる。

… (中略) …

芸術は既に個々のものでない民族自体のものであり国家自体のものである、茲に大東亜共栄圏の重要な一翼として西北亜細亜の関門を確保する蒙疆に於けるその美術家のまた美術作品の指向すべき目標は判然するであらう。この目標に向つて美術家協会はこの研究所をその本部事務所とし内会員相互の精神的、技術的練磨を図り外現地人を指導して正しい美術を認識させ草原の芸術、朔北の芸術を甦らせ悠遠なる東亜民族的伝統に新しい息吹を与へてこの蒙疆の地に即せる正しい文化の創成に積極的に働きかけやうとするのである。¹⁸⁾

この引用文を読めば分かるように、深澤省三の主宰する蒙疆美術家協会及び蒙古美術研究所が目指していた新しい「美術」は、草原の芸術、朔北の芸術伝統を蘇えらせると同時に、蒙疆文化建設または大東亜共栄圏建設の時流に合わせようとするものであったと考えられる。

4. 「蒙疆」時代の絵制作

「蒙疆」滞在の約8年間、深澤省三が精力的に絵を制作した時期であり、度々個展が開かれている。「年譜」には「昭和十四年 一九三九 40歳：一月、蒙古より帰国。牧野虎雄の主催する旺玄社展に蒙古での作品三六点と、徳王の依頼で収集した綏遠青銅器・鼻煙壺などを特別陳列する」とあり、また「三月、盛岡川徳にて『深澤省三蒙疆風物展覧会』を開く。『蒙古婦人』四点、『隊商』『蒙古平原』『駱駝』四点、『雲岡石仏』九点など油彩画三四点と、素描画三〇点を出品する」¹⁹⁾と記されている。そして、『蒙疆文学』昭和18年12月号(2巻9号)に載った「文化消息」欄の一つには、

蒙古自治邦政府主催の第二回蒙古美術展覧会が去る十一月八日から十二日まで張家口第一

17) S「蒙疆美術協会小品展評」、『蒙疆文学』昭和17年9月号、49頁。

18) 高玉輝雄「蒙疆美術家協会研究所設立について」、『蒙疆文学』昭和18年3月号(2巻3号)、62頁。ちなみに、蒙古聯合自治政府の郵政担当者が昭和19(1944)年2月に『切手文化』に寄稿した記事中に、「大東亜戦争二周年記念切手」の原画に採用された「龍烟鉄鉞の坑内に於ける採鉞の状況」を描いた絵の作者として「蒙古美術協会会長 深澤画伯」という記述が見える。詳しくは、小島義昌「蒙疆の「大東亜戦争二周年記念切手」の原画制作者について——『赤い鳥』の挿絵画家『深澤省三』——」、『中國郵便史研究』第122号、2008年2月、17頁を参照のこと。

19) 「深澤省三年譜」, 前掲『深澤省三画集』, 192-193頁。

国民学校に催された。これに前後して深澤省三氏の個人展が東亜会館で開催された。



この前、麻生豊氏が日本画の個展を同じ東亜会館で催したがその時の売上は二万円に近かったと云ふ噂であり、今度の深澤氏の個展もまた一万七千円を超えたと云ふことであつた。

絵が判るとかどうとか云ふことは別問題として人口一万七八千人の邦人しかみない張家口にこれだけの美術マーケットがひらけてゐたことは注目に値する。²⁰⁾

と書いてある。これらの記事をふまえれば、当時、深澤省三は「蒙疆」の代表的画家として広く認められ、人気を博していたと言えよう。

1945年8月、「蒙疆政権」は日本の敗戦と共に倒れた。同年12月、深澤省三は本国に引き上げてきたが、「絵はほとんど現地に残したままだった」という²¹⁾。よって「蒙疆」時期の深澤省三の全作品を見ることはできないが、以下、残された数少ない絵についてその特徴を分析してみたい。

『深澤省三画集』に収められた「1938～1945」と制作年代が付されている作品を見てみれば、殆どモンゴル風の人物、風景、動物を題材とするものである。中でも、人物のスケッチや肖像画は殆ど「蒙疆政権」の上層部にいる人間及びその家族をモデルにしているようで、深澤の当時の人脈によるものであろう。スタイルにおいては、これらの絵に描かれた大陸人の骨格と容貌は、深澤の童画に現れる「西洋的ハイカラさを持った人物」²²⁾とは対照的である。同時期に描かれた風景画は、深澤の渡蒙前の風景画とスタイル上の連続性を持っているが、蒙疆時代の作品では、印象派的または後期印象派的な構図と色彩が最も鮮明になっていると言えよう。

最後に、「蒙古軍民協和之図」を見ておこう。題名が示すように、占領軍と占領された「蒙疆」地域の「民」との「協和」ぶりを表すもので、前景に立っている人物は皇族の北白川宮と「蒙疆政府」の最高顧問・金井章次をモデルとしている。周知のように、この北白川宮永久王（1910～1940）は、陸軍大将の北白川宮能久親王と明治天皇の第七皇女房子内親王との間にできた第一王子であり、当時、参謀たる陸軍砲兵大尉として「蒙疆」に駐在していたが、昭和15（1940）9月4日、張家口で行われた航空演習の事故に巻き込まれて死亡した。そのためであろうか、昭和16（1941）年7月、陸軍の外郭団体・陸軍美術協会によって開催された「第二回聖戦美術展覧会」第十一室（陸軍作戦記録画の部）に展示されたこの絵²³⁾は、昭和天皇の「天覧画」に入り、従軍画家としての深澤省三に大きな名誉を齎したのである²⁴⁾。しかし、この絵をよく見てみれば、深澤は風景画と人物（動物）画を一つの画面に凝縮しようとしているが、後景にある長城と山、前景にある動物と人物のバランスがよくとれているとは言えない

20) 「文化消息」、『蒙疆文学』昭和18年12月号（2巻9号）、37頁。

21) 仙仁司「深澤省三の童画世界」、前掲『深澤省三画集』、173頁。

22) 仙仁、前掲『『赤い鳥』と深澤省三の童画世界』、63頁。

23) 『第二回聖戦美術展覧会目録』（朝日新聞社東京本社、昭和16年7月）、13頁参照。133の出品番号が付された陸軍省貸下の同画の説明書きには、「故北白川宮永久王殿下には蒙古御出征中、枢機に御参画せらるる傍ら常に軍民協和の事に御心を用ひさせられたことは海に畏き極みである。本図は張家口大境門外より蒙古平原に続く河原の市場に立たせられ蒙古人漢人の雑踏の中に親しく民情を御視察あらせられる殿下を謹写し奉たものである。扈従員は蒙古聯合自治政府最高顧問金井章二氏及び御付武官築山中佐である」とある。

24) 陸軍美術協会編『聖戦美術』第2輯（昭和17年6月、非売品）所収の「天覧画に就いて」という文に、昭和天皇および皇后が「殊に深澤省三氏作「蒙古軍民協和之図」には故北白川宮永久王殿下の御面影を偲ばせ給ひ、一しは御感深くわたらせた趣に洩れ承る」とある。

ようである。とりわけ、「軍」側の視線と「民」側の視線には、親しく接していると言うより、むしろ現地の「民」たちが外部の侵入者としての「軍」に対して緊張している雰囲気が漂っている。言い換えれば、深澤省三は、不本意ながら、「蒙疆」の激動の生活を体験する画家の直感で、そうした「不協和音」を表すことに至ったと思われるのである。